

發派の説の如きも行はれるのである。依つてかの影像を返還し、他郡と歩調を一にして金澤別院の監督を受け、邪論の跡を絶ちたいといふにあつた。是に於いて本山は明和六年湖法院を使僧として加賀に下し、影像を別院に移すが爲に、本蓮寺をして郡中三十餘寺を會して承諾の捺印を徴せしめた所、長圓寺・稱名寺・法海寺は同意したが、本覺寺・勸修寺・本光寺等は承服せず、勝光寺は態度を明らかにしなかつた。是より門徒間の物情騒然、白山山麓の幕府領諸村民までも小松に來り、勸修寺の影像を守護せんが爲鐵炮を佛壇に列ねて警戒し、之に對して本蓮寺は本山の命によることを高唱して影像を奪取せんとした。かかる際翌七年二月六日夜勸修寺の鐘を撞くものがあると同時に、群民蜂起して勝光寺と稱名寺を襲うて亂暴し、本蓮寺・長圓寺に侵入して堂塔佛像を破壊した。後加賀藩は本蓮寺側が騒擾の因を爲したを非として閉門を命じ、事一たび落着したが、而も兩黨常に相反目してゐたのを、享和中金澤の永臨寺能起の周旋によつて初めて和解した。

コマツシユウカクシヨ 小松集學所 ↓シ
ユウギドウ 集義堂。

コマツシヨウ 小松庄 元祿元年撰編白往生傳に、『符鑑。字本譽。又稱。口稱。加州小松庄人。』とある。併し符鑑は承應元年示寂した人で、その頃小松庄の名があつたとは思へない。

コマツジヨウ 小松城 (一)沿革—能美郡に在る。もと一向一揆の徒の據る所であつたといふが、その沿革は明らかでない。天正八年柴田勝家が加賀の一揆を平定するや、織田

信長は村上次郎右衛門頼勝を能美郡六萬六千石に封じ、小松城に鎮せしめた。十一年羽柴秀吉、丹羽五郎左衛門長秀を越前、若狹遠敷郡及び加賀の江沼・能美二郡に封じ、頼勝は長秀の興力となつた。十三年四月長秀歿し、子五郎左衛門長重の時、越前・加賀の所領を除かれたが、頼勝は尙小松城に在つて、越前北庄城主堀久太郎秀政の興力となつてゐた。次いで慶長二年秀政の子左衛門督秀治は越後春日山城に移り、頼勝も亦同國本庄に轉ぜしめられた。長重は先に加賀の松任城に在つたが、是に至り秀吉の命によつて小松城に移り、前領四萬石の外新たに八万石を加へて加賀守と稱した。五年前田利常長重と戦ひ、幾くもなく和議を講じたといへ、徳川家康は長重の豊臣氏に黨したのを責めてその領邑を撤ひ、利長をして悉く之を併させた。寛永十六年前田利常老を告げ、小松城を以て菟裘の地と定め、城郭の經費を改め、翌十七年六月七日江戸を發し、東海道を経て小松に入り、二丸に住したが、家臣の従ひ來り邸を城下に構へるもの多かつた。萬治元年十月十二日利常の薨じた後、閏十二月徳川家綱は小松城を前田綱紀に附した。蓋し寛永十五年幕府令して一國一城の制を定めたので、封内大聖寺・小松・七尾諸城皆廢したが、翌十六年利常更めて小松城を築くの許可を得たため、遂に藩末に至るまで之を遺し得たのである。今僅かに櫓臺の遺址を存する。

コマツジヨウ 小松城 (二)城郭の規模—本城の規模は本丸一週六町五十間三尺、二ノ丸一週六町十間、三ノ丸一週八町十六間、中土居一週九町十間、葎島一週八町、琵琶島一週六町十三間、その全周二

十四町であつた。

(三)水利—本城は平城ではあるが、水流の迂餘榮回甚だしく、一朝梯川の河口を閉塞する時は、附近一帯に一大湖水の觀を呈するから、鑿りて防禦するもの、利便は大きい。殊に利常の財力を傾けて之を經營した後は、遂に小松の浮城といふ名稱を以て人口に膾炙することになつた。その梯川の水利用した壘壕の設計に關しては、天明中城番であつた富田景周の越前三州志に『凡そ小松城の壘水は梯川の水也。其水口は梅林院の向より入、下駄橋下を松任町に落ち、千桑畑の後を流れ、中蔵へ出づ。是より二流となり、一水は馬廻の土居宅の後を廻りて、北庄橋下を過ぎて廣處へ出で、是より一流と成て河口へ出づ。又一水、舟止二枚橋下より白鳥壘へ出で、是より牧島と中土居との間を通り、琵琶島腰を過ぎて愛宕前へ出で、長橋の下を歴て、夫より内壘へ入りて二派となり、左の水は筋違橋下を流れ、葎島と樂屋つゞきの間を歴、本丸に沿うて繞る。右の水琵琶島に沿うて、(この間石橋の下より外壘の水流れ入るなり)壘所橋下を通り、車橋の下より本丸を繞り、左右の水一流となり、敵樓の向かうより白鳥壘へ出づ。總べて此城壘の水は流ることなきゆゑ、首尾の叙次なし。又一水、外壘松任町の背口にあり。琴願寺門口より掘出し、横京町邊にて止む。又一水、外壘あり。梯川橋の少し下流より梯河の水入り、小橋の下を歴て、

新町の横を通り、小寺橋下を通り、本蓮寺を繞り、九龍橋・安齋橋下を流れ、濱田の渡口へ流出す。又此外に藥研堀あり。是は竹島と濱田との間也。未は七十間米廩邊まで至りて止る。』と記してゐる。

コマツジヨウコウ 小松城考 一冊。文化四年富田景周著。加州小松城考とも加賀州小松城考ともいふ。小松城の起源から、前田利常の隱居した寛永十六年乃至萬治元年の事情が記され、小松城圖一帳、敵樓圖九帳が添へられてゐる。但しその文は、越前三州志來因概覽附録卷之三小松城の條に同じい。

コマツジヨウダイ 小松城代 初めは年寄衆から勤め、中頃から家老を以てした。即ち慶長五年十月前田源峰長種之を命ぜられ、その子内記直知、その子對馬直正、その子長松(孝貞)の後見志摩直成まで在城したが、寛永十六年からは前田利常の隱居在城することになつた爲當職はなかつた。然るに萬治元年利常の逝去後は横山左衛門忠次、二年正月から前田三左衛門直之、延寶二年十一月から前田平大夫長成が命ぜられ、七年八月長成の歿後に至つて再び之を廢し、天和三年三月前田佐渡孝貞が命ぜられて移住を廢し、元祿八年よりは月番年寄中の任となり、十六年七月また前田備前貞親に命ぜられ、役知三千石を賜はり、以後例となつた。寶永二年十月貞親の歿後關職となつたが、次いで享保元年七月には前田修理知頼、元文四年十二月にはその子修理知久が代り、延享五年六月奥村内膳成象、寛延二年九月青山將監聚次を経て以後連綿したが、明和八年九月前田修理知雄の病死してから關職となつた。

コマツジヨウナンジヨウホクフ 小松城南城北賦 一冊。城南賦は、小松町公領橋を界として南方に當る地區の名所各物を書き列ねたものであり、享和三癸亥年冬十月岸柳屋述